

研究課題

# 近隣語教育教材（多言語e-learning）の開発と普及

副題

学校名	e-learning 活用近隣語教材作成グループ
所在地	〒151-0071 東京都渋谷区本町3-2-2 関東国際高等学校内
職員数/会員数	11名
研究代表者	黒澤 眞爾
ホームページ アドレス	<a href="http://www.kantokokusai.ac.jp">http://www.kantokokusai.ac.jp</a>



## 1. 背景と研究目的

近年、国内外のグローバル化が一層進み、日本の若者に求められる言語スキルも以前とは変わってきている。国際共通言語としての英語コミュニケーション能力に加え、未来を共に行動するパートナーの多様な母語をいかに駆使してコミュニケーションをはかっていくかが重要なスキルになりつつある。特に、中国や韓国、ロシア、東南アジア諸国など、日本を取り巻く近隣諸国の言語を学び、それを戦略的に使用していくことは、重要なスキルになるだろう。このような状況であるにも拘らず中等教育においては英語のみが偏重され、近隣諸国の言語が殆ど教授されていない。これは残念でもあり、また心配でもある。

本研究グループの代表校関東国際高等学校は、1986年の中国語コース開設以後、ロシア語、韓国語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語の各コースを開設し、現在、基礎外国語である英語とともに7言語の外国語教育を実施している。英語を除く6言語を「近隣語」と称し、英語+近隣語学習を広く提唱している。

関東国際高等学校では、以前より、近隣語学習におけるe-learning 自律型学習の導入を何度か試みたが、システムの不備や生徒のモチベーション不足等の理由により継続的な使用には至らず、良い方法を模索していた。2年前に、財団法人日本私学教育研究所が多言語 e-learning 推進のために e-learning のシステムを無償で提供していることを知り、財団と協議の結果、このシステムを活用できるようになった。2008年度と2009年度の2年にわたり、このシステムをもとに独自の多言語教材を開発し、中国語、ロシア語、韓国語の

基礎学習において e-learning 授業を取り入れ、生徒の基礎学力向上の面において一定程度の成果を上げることができた。関東国際高等学校が、2年間で開発・実施した多言語 e-learning は、概ね以下のような内容である。

- ① 1年生で学ぶ各言語の基礎単語を集約し、綴りや意味、発音を理解・定着させるための問題を制作し、これを生徒に課題として出した。
- ② 1年生で学ぶ各言語の重要文法事項を集約し、正解を選択肢の中から選ぶ問題を多数作成し、これを生徒に課題として出した。
- ③ 各言語固有の「誤用頻度の高い」問題を別個に作成し、定期試験の前に集中的に学習させた。

上記の問題を課題として出す場合、期間を限定し、生徒のアクセス回数と正答率をチェックするようにしたところ、定期試験の点数とアクセス回数は概ね相関関係を表しており、基礎学習においては、この e-learning システムが極めて有効であることがわかった。

2年間の試験的な運用で、関東国際高等学校における多言語 e-learning 学習は定着しつつあった。しかし、課題がないわけではなく、また今後のさらなる普及を考えたとき、様々な不備があるのも事実であった。以下のような事項が課題となった。

- ① e-learning 学習が単純なワークになりがちで、生徒の学習へのモチベーション維持が難しい。生徒が、より興味を持って学習にとりくむようになるための何らかの「しかけ」が必要である。
- ② 上記の①と関連して、今後の e-learning 学習に対して生徒からのリクエストの中で最も要望が多かった「音声教

材」の導入を試みる必要性が生じた。耳から入る学習に慣れているせいだろうか、音声での学習を望む生徒が多かった。

- ③ 「音声教材」を作成するためには、現状のサーバー状況では、情報容量に耐えられない。そこで、サーバーを新たにし、また音声を取り込むためのシステムを構築する必要がある。
- ④ さらに、本教材に汎用性を持たせるために、広範囲にわたって、高校生に使用を促し、その結果を分析する必要がある。

## 2. 研究の方法

上記のような課題を克服するため、関東交際高等学校の近隣語担当の教員と複数校の近隣語担当教員が集い、近隣語学習 e-learning（普及版）の制作を目指して研究活動を実施していくこととなった。本研究会が設定した年間の研究スケジュールは、概ね以下の通りである。

- ① 受講できる生徒の数を増やし、かつ大容量の音声教材を作成可能な状態とするためサーバー環境の改善をはかる。
- ② 関東国際高等学校の中国語、ロシア語、韓国語のネイティブ教員の音声を試験的に取り込み、音声教材を作り、システムに取り込むことが可能かどうかを確認する。
- ③ 上記のサンプル教材を実際に複数の生徒が使用し、適正な教材であるかどうかを確認する。
- ④ 実際の定期試験の日程に合わせて音声教材を作成し、生徒たちに課題として提出する。
- ⑤ 定期試験の結果と生徒のアクセス状況との相関関係を分析する。
- ⑥ 上記の結果をメンバー間で共有し、再度内容について検討する。
- ⑦ 1年間の実施結果を検討・分析し、今後の教材開発に生かしていく。

## 3. 研究経過及び結果

上記の研究スケジュールに基づき、主に関東国際高等学校の生徒を対象に e-learning 学習を実施した。結果は以下の通りである。実施言語である中国語・ロシア語・韓国語に分けて報告する。

### － 中国語 －

- 実施時期：平成22年4月～平成23年3月
- 問題作成：白井聖大、陳偉偉
- 対象生徒：関東国際高等学校中国語コース1年生21名
- 教材内容：音声教材3題
  - (教材1) 単語の聞き取り 10問
  - 質問に対する答えを4つの選択肢から選ぶ形式
  - (教材2) 会話表現 10問

質問に対する正しい受け答えを4つの選択肢から選ぶ形式

- (教材3) 会話表現 20問
- 教材2と同じ形式

### ■実施状況：

(教材1・2) 1学期に学習した内容を元に、音声教材に慣れさせるために作成。1回のみでの活用で、以後使用しなかった生徒もいたが、繰り返し取り組んだ生徒はほぼ3～4回のチャレンジで合格ラインに到達したようだ。

(教材3) 9月～10月までに学習した内容の中から、会話表現に焦点を当てた。2学期中間試験の10日前から問題を公開して練習をさせた。これまで同様、3～4回のチャレンジが合格ライン到達の平均だった。

### ■e-learningの活用と試験結果との相関関係

2学期中間試験では、(教材3)の中に含まれる表現や単語の中から10問(20点分)をリスニング問題として出題した。2回ずつ読み上げ、正答を選択させたり、書き取らせる形式にした。

中国語コースの場合は在籍する生徒の中にネイティブスピーカーも多く、初級レベルの出題では e-learning そのものに興味を示さない生徒も多い。そのため、e-learning の導入、特に今年度初めて導入した音声教材への取り組みが試験の全体的な結果に直接結びついていたかどうかを分析するのは困難である。しかし、初級学習者の多くからは「反復練習の良い教材である」との意見がアンケートを通じて届いている。英語以外の外国語は高校生対象の教材が少なく、また、高価なものが多い。e-learning は受講者にとって何回チャレンジしようとも、その都度出題がリセットされるメリットがある。反復練習は学習内容の定着に一番効果的な方法であり、有効な学習方法だと考える。

### ■今後の課題

「音声教材」、「映像教材」などコンピュータ学習ならではの内容を盛り込み、モニターに向かう学習スタイルの定着を図りたい。また、生徒のレベルに応じた中級問題や上級問題も作成し、全員が興味や目標をもって e-learning に取り組める学習環境を整えたい。

### － ロシア語 －

- 実施時期：平成22年4月～平成23年3月
- 問題作成：竹内敦子、オレグ・ビソーチン
- 対象生徒：関東国際高等学校ロシア語コース1年生11名
- 教材内容：音声教材3題
  - (教材1) 既習の会話表現 20問
  - 質問に対する答えを3つの選択肢から選ぶ形式
  - (教材2) 数字表現 25問 \*数字を含む表現(時間、年齢、ものの値段)の聞き取り
  - ロシア語で書かれた文章の空所に適切な数字

を入れる形式

(教材3) 数字表現 39問 \*教材2と同じ文章  
読まれたロシア語の日本語訳の空所に適切な  
単語や数字を入れる形式

■実施状況:

(教材1) 1学期に学習した会話表現を復習し定着させる  
ために作成。

大半の生徒たちは1日に「合格」するまで繰  
り返し解答している。

(教材2・3) 4月~10月までに学習した内容の中から、  
間違えやすい数字表現に焦点を当てた。2学  
期中間試験の10日前から問題を公開し、「合  
格」するまで解答することを、試験実施日ま  
での課題とした。

■e-learningの活用と試験結果との相関関係

2学期中間試験では、(教材2・3)の中から10問をリス  
ニング問題として出題。文章は3回ずつ読み上げ、数字や単  
語を聞き取り、日本語で空所を埋める形式。

(例) Сколько сейчас времени? Сейчас (11) часов.  
「今何時?」「今(11)時」  
Этот (телевизор) стоит (9741) рубль. 「この(テレ  
ビ)は(9741)ルーブルです」

対象	アクセス数	得点	対象	アクセス数	得点
生徒1	1	8 (70)	生徒7	24	6 (82)
生徒2	4	5 (64)	生徒8	5	7 (55)
生徒3	0	5 (71)	生徒9	0	6 (25)
生徒4	3	5 (83)	生徒10	3	6 (55)
生徒5	6	10 (97)	生徒11	7	7 (86)
生徒6	10	7 (80)			

\* アクセス数は中間試験前に教材2・3に取り組んだ回数を表す。  
\* 得点はリスニング問題10点満点中の得点を表す。( )内は中間  
試験での総合得点を表す。

今年度、初めて e-learning に音声教材を取り入れたが、  
「音が小さい、片側からしか音が聞こえない」などの不具合  
もあり、十分に活用させることができなかった。ロシア語コ  
ースでは2学期中間試験のみでしか音声教材を取り上げるこ  
とができなかったため、データは非常に少なく、これだけで  
は e-learning の活用と試験結果の相関関係を分析するのは困  
難である。次年度は全学期のデータを収集し、更に効果的な  
教材作りに取り組もうと考えている。

■今後の課題

e-learning 教材は言語学習において大変有効な学習ツ  
ールであると思うが、今後は「音声教材」の問題数を増やし、  
生徒が興味を持って自主的に学習に取り組めるような内容に  
していきたい。また、映像や画像を取り入れた出題や、携帯電  
話での e-learning 教材の使用の可能性を模索していきたい。

－ 韓国語 －

■実施時期: 平成22年4月~平成23年3月

■問題作成: 金ドンウン

■対象生徒: 関東国際高等学校韓国語コース1年生15名

■教材内容: 音声教材3題

(教材1) 2008年度秋 ハングル検定5級 聞取問題  
(17問)

ハングル検定の聞取問題の実戦練習

(教材2) 単語練習 <韓国語 単語の聞き取り> (6~  
13課 25問)

韓国語を聞いて、日本語の意味を探す形式

(教材3) 数字練習 <韓国語 数字の聞取> (15問)

読まれた韓国語の数字を聞いて、それに合う  
数字を探す形式

■実施状況

(教材1) ハングル検定を控え、自分のレベルをチェッ  
クし、練習する為に作成。

ハングル検定を受験する生徒3人が実施。

(教材2・3) 発音の変化が激しい単語と数字を選んで、  
聞き取れるように練習することに焦点を当て  
た。2学期中間試験の1週間前から問題を公  
開し、「合格」するまで繰り返すよう指示した。

■e-Learningの活用と試験結果との相関関係

2学期中間試験では、(教材2・3)及び E-Learning 単語練  
習の中から15問(全体の20)を出題した。聞き取りは韓国  
語を聞いて意味を探す、又は韓国語の数字を聞いて正しい数  
字を探す形式。

	人数	平均成績(韓国語1)
教材2・3を全て実施した生徒	8名	81.1
教材2・3の一部を実施した生徒	3名	70.7
教材2・3を全く実施しない生徒	4名	57
合計	15名	

生徒によって差が大きかったが、上記の表を見ると e-  
Learning を通じて教材一回で10点くらいの差が出るこ  
とが分かる。この成績の差がすべて e-Learning によるもの  
とは言えないが、すくなくとも e-Learning が韓国語の学  
習にある程度の効果があると判断できる。

■今後の課題

今年度、初めて e-Learning に音声の教材を取り入れ、シ  
ステムを作ることに成功したことは大きな一歩であると思  
っている。これからは教材をさらに忠実させ、多様な韓国語  
の学習や練習が出来るようにしたい。



e-learning 授業の様子

e-learning 学習画面(韓国語)

## 6. 研究の成果と今後の課題（総括）

上記のように、今回制作した音声教材は「近隣語 e-learning システム」は、生徒の自律学習において一定程度効果があることが判明した。今後、関東国際高等学校以外のメンバー校での導入を進め、より多くの生徒が触れることができるように、システム改善をはかっていくつもりである。

本報告書の冒頭で言及したように、本研究会が扱っている近隣語の教育は、今後より重要性を増してくるであろう。本研究会の試みは、そのような時代の要請に沿うものであると確信している。